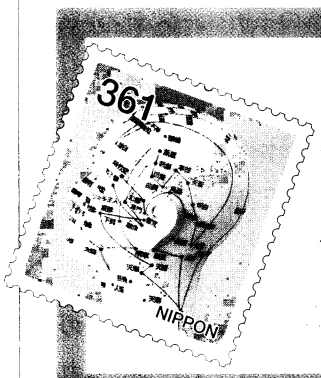

「第二次日本経穴委員会」便り

～第23回　ツボ研究の方向性～

第二次日本経穴委員会作業部会委員長　形井秀一（かたいしゅういち）

1. 経穴部位標準化は何を意味するか

2003年以来行っている経穴部位の標準化作業は、多少の遅れはあったが、2006年3月の第6回東京会議で日中韓による標準化案（中国語）は最終合意に達した。今後は、細部を詰めることと、英語化して世界に問うこと、10月31日～11月2日の日本（つくば市）で開催される公式会議で最終決定することとなった。

ツボの位置を標準化することは日本の、否、世界の鍼灸界に必要なことと考えているが、実は反対の視点も存在する。「ツボは生きたもの」であり、「患者の病態により異なる」ので、固定的に考えてはいけない、というのが、最も多い声かも知れない。つまり、一人ひとり、また、病態ごとにツボの位置は異なるので、位置を決めることに意味がないという指摘である。

いくつかの意味を含むが、そして、誤解をされることを覚悟で述べると、ツボは固定的でないという考えに基本的なところで私は賛成できる。確かに、刺鍼点は病態ごとに異なるし、同名の病態でも人や病期によりツボの位置が異なりうる。そのうえ、刺鍼できる部位は同時に複数存在するので、その中のどれを取るかで、同じ病態でも病人ごとに違いが生じる。あるいはまた、病態を表現する部位がある大きさ（深さと広がり）を持っている場合、そのどこに刺鍼するかで、同じ名前のツボでも部位は異なることになる。

さて、ツボは生体の病状が体表の一定点、あるいは一定領域に表現されるという考え方を前提としている。だが、すでに述べたように病状ごとに体表に現れる部位は異なるであろうことは容易に想像できる。しかし、それでも、どこに現れるのかを明確にすることは必要である。もし、病気の状態を表現するツボがあるとしたら、生体にはツボ現象を表す何らかの形態学的構造がなければならないであろう。もし、そのような特別な構造はないとしたら、病的状態が現れやすい部位が機能的に存在するだけかもしれない。しかし、さらに言えば、東洋医学が成立した当時、西洋医学のような詳細ではなかったが、簡単な解剖は行われていたという前提に立つと、現在行われている国際標準化の作業は、発祥時の東洋医学の解剖学の不備を、現代解剖学的表現で書き改めようという試みであると言えるだろう。依拠する古典を決めて、その古典で示されている位置を現代解剖学で表現しようとしているのが、今回の試みであるからだ。

では、ツボの位置が決められていないとすると治療点はどのように決定されるというのであろうか。それは、教科書で定められたツボの周

囲でその時に反応のある部位を選ぶことになるのだろう。だから、ツボを標準化する必要はないということになる。

しかし、そのような言い回しが教育課程で通用するのは、日本だけではないだろうか。あるいは、日本的発想で鍼灸を学んだ人たちの間のみである。日本的なツボの発想としてはそのような取穴でも正しいかも知れないが、そうであっても、定められたツボとその周囲のどこにその疾患と関連する反応部位があるかを明確にする必要があるだろう。そのために何が必要か。まず、基準となる位置が必要である。そして、その後に、その位置を基準にしてどれくらい離れた位置に生きたツボが実在するかを示すべきである。もし、そのような行程を踏んだとすると、それは、ある疾患に対する反応や治療部位を明確にすることであって、結局は、ツボという概念の域を出ていないのではないか。そして、それをさらに詳細に体系化したものが、つまり、ツボなのではないのだろうか。

2. ツボ研究の今後

さて、今回のツボの標準化は、ツボに関する研究の最終の成果を踏まえたものではない。ツボ研究の方法は、表のようにいくつか考えられるが、今回の標準化は、「1. 文献学的研究」に重点を置いたものである。いくつかの古典で示された位置を比較し、日中韓で歴史的に生じた差異を修正し、確定する作業である。そして、その確定した部位を古典的にではなく、現代解剖学の用語で表現するものである。しかし、解剖学用語で表現するよう努力はしたが、解剖学的・形態学的な裏付けを学術的に確認したわけではない。今回の委員会はそれを行っていない。

ツボ研究の方法

1. 文献学的研究
2. 形態学的研究
   ①ツボの形態学的研究
   ②経絡・経穴の研究
3. 機能的研究
4. 臨床的研究

ツボの研究の方法

そこで、今後行う必要のある研究でまずあげられるのが、「2. 形態学的研究」であろう。それには、ツボそのものを形態学的に検証することと、経絡・経穴を体表解剖で確認する方法があろう。さらに、生体の状態を表現したり、変化させたりする特異な点が体表に実在するのかを機能的に研究する必要があるし、臨床的研究としては、ツボと仮定される部位とその他の部位の臨床的効果の比較から、正しいツボを追求する必要があるだろう。

日本ではこれまで、上記のようなツボ研究はそれぞれに対して興味を抱く研究者が行っており、それぞれに成果を上げてはきている。しかし、経穴部位国際標準化作業を通じて痛感することは、体系的・持続的なツボ研究が今まで以上に必要だということである。それは、ツボの研究が、鍼灸研究の根幹の一つをなすものであるという思いを強くするからである。鍼灸学は、体表刺激と生体の反応を発見したことに端を発した。すなわち、ツボの発見が鍼灸学を発祥させたのだと思う。それゆえ、鍼灸学を探求するには、ツボ研究が重要である。鍼灸研究の大きな柱として、今後さらにツボ研究を推し進める必要があるだろう。